

これ（学問、道）を知るものは、これを好むものに如（し）かず。

これを好むものは、これを楽しむものに如かず（論語・雍也第六）

開倫塾

塾長 林明夫

1. (1) 孔子の教えに、「これ（学問、道）を知るものは、これを好むものに如（し）かず（及ばない）。これを好むものは、これを楽しむものに如かず」（論語・雍也第6編）とあります。
(2) この意味は、「(学問、道を) 知るということだけでは、これを愛好することに及ばない。愛好するということは、これを楽しむことに及ばない」
* 吉田賢抗著「論語」新釈漢文大系1、明治書院1975年改版、140ページ。
(3) 「ある物事について、それを単に知っている者は、それを好む者には及ばない。しかし、それを好む者だって、その物事について楽しむ者には及ばないのだ」
* 須長美知夫著「論語抄」史跡足利学校1993年5月25日刊、38ページ。
2. (1) 「学問を知っているものは、学問を好むものに及ばない。学問を好むものは、学問を楽しむものに及ばない」
(2) 「学問を知るものは多いが、学問を好むものはいたって少ない。学問を楽しむものとなると、滅多(めった)にいない」と、(孔子は) 慨嘆(がいたん) している。
(3) 吉田松陰こそ、その滅多にいない珍鳥、「学を楽しむ者」ではないのか。
3. (1) 松陰は、江戸の獄から移された。「野山の獄」は、ひどいところであった。
(2) 松陰自身が書いている。「髭(ひげ)は凍り、寒さは膚(はだ)にとおる。太陽は見えないし炉もない。眠っていてもすぐに起きてしまうし、悲しい思いがこみ上げてくる」
(3) この悲惨な境地で、求道者松陰の面目は発揮された。彼は、直ちにこの環境を最大限に活用した。
4. (1) 国事に奔走し、海外渡航を企てたりして、しばらく、ゆっくり読書している時間がなかった。今こそ読書だと、入獄早々、一心不乱に読書を始めた。
(2) 松陰は、兄杉梅太郎から書物の差し入れをしてもらって貪(むさぼ)るように読んだ。書き抜きをし、感想も書いた。たちまち数十冊を読んでしまって、次々に要求を追加する。
(3) 松陰は、この読書を「自ら楽しむ」と、親友米原良三に書き送っている。彼は、獄中のひどい湿気と厳寒の中にあつて、読書を楽しんでいた。
* 以上、4～6は、小室直樹著「歴史に観る日本の行く末」青春出版社1999年2月10日刊、102ページより引用。

5. (1) 論語の「知・好・楽」の三字の客体は何を指すかははっきりしないが、やはり、「学問」とか「道」とかを対象にして、その人々のこれに対する態度の浅さ、深さを述べながら、「知よりは好を、好よりは楽を」と念願した孔子の心境であろう。
- (2) 況（いわん）や、これを知らないものに至っては、孔子のいわゆる「これをいかんとするなきもの」である。
- (3) 人生に生きるということを知る。生きていくことを好む。生きることを楽しむ。人生を楽しむ人は幸福である。必ずしも富貴にならなくてはならぬということではない。人生を楽しむような人間になりたいものだ。
- * 吉田・前掲書、141 ページ。

<コメント>

学問や道、人生に対するこのような基本的態度は、どのように育かれたのか。その時々「教育者」の果たすべき役割の大きさを考えたい。

2019年2月25日(月)林明夫